里見八犬傳

第九輯　巻五

13
3416
53

へ13
3416

九編六卷之内

松野勝美院

南總里見八犬傳第九輯卷之五

東都　曲亭主人編次

第百回　舊黨招ㇾ應して土民益憂ふ　返魂術を異ふして美人弥奇ㇾ

却説蟇田權頭素藤ハ奸計既ㇾ衍れて館山の城を獲てより先兎巷遠親ゞ三族を誅戮して。その犯逆の罪悪を。他一人ㇾ負しる陽出いで賢良貌して先代の悪政を改ぎとゝ。民を極士を愛して。廣く施を好むㇾ似れば。誰ろその内心を賽時政小王莽の綽號負せんよりもと知るべし年來小鞠谷如満ゞ暴虐ㇾ周蔽る。民ハ〻〻士卒ハ〻牛ㇾ馬を乗替る。賢君ㇾ元と稱賛ㇾ皆歡びて仕へけり。當下素藤思ふ。我ハ他郷の浪人也。猛可ㇾ夷濟一郡の主ㇾ。ゝ當國の武士們ゞ媚くㇾ。他們ハ才ㇾ一城の小敵ㇾれば怕るㇾ足らず。只左ㇾ就ても右ㇾ就ても侮り

文溪堂藏

かくて里見の義実義成相續して既に上總を併呑されば當城も那麻毛下に在り
當初里見義実が結城の城を没落せし安房（流寓さる）折神餘が與に義兵を起
して那逆臣定包を討て長挾を奪ひ我が遠親を誅戮せし夷濃七郡司の
なほ這那夜に似たれども時と勢ひと同じからず今當城の士卒は我身の羽翼なるべし又
那金碗孝吉の智勇に似たるものもなく譜第恩顧の老黨に杉倉堀内の如きものあり
然るに里見に肩を競て獨立割居の肱を張らば彼大敵を招く姑く他に従て徐に
謀るに如くとめ〻と尋思をあぐらし隨便浅木碗九郎并に奥利本膳に
示使して准備の贄を齎し安房の稲村の城へ遣せし里見の四家老杉倉堀内
東荒川に就て今番館山の城の内乱を訟て支侯々とのいとまを扶る當城の主小鞠
谷主馬助如満は年來暴悪の冥罰を計りやありけん往日家臣兎巷幸弥太遠親に殺
れ訖ぬ墓田權頭素藤と喚做せるものあり殿臺なる諏訪明神の神職さ

へども文学あり武藝に長たり且心操慈善にして人の憂ひを分ちまつるあり
義の與に那逆を憎むに沿堪ざる矢庭に降魔の利剣を振て逆賊遠親を誅し
たる其功寔に莫大なるの故に小鞠谷の家臣夷濃の土民は推て素藤を主將として
俱に孤城を成して在り是素藤が次心に一郡の主たるべきを大方のあん隊に
屬て勉て忠義を盡さんと與のみ當國は迷もなく量裏にあんなるを入りてれども尚野心の者
なるにあらじ素藤奉公の勤に折々心を其頭に潛めて虚実を探り邪正を覘ひ諭せば
くに諷諫して悖逆の惑ひなるを諭せども従はざるその折御征伐をこそいとぐ
先鋒たらまく欲せば是素藤が情願なり是ほかに両個の倍臣浅木碗九郎嘉俱奥利
本膳盛衡は瑣小の土宜を獻呈して今年毎に奉文貢獻を
缺くべからず支一亳も食言なば照據に依てそは家臣は連署の起請文一本を
まうしてせば口は曾免許を請ひけり是より先に義成主は那小鞠谷如満の殘暴を

あるふより。支ひらく定るべ自恣暴慢の罪と糾あて。民の塗炭を極んとそ。先隱秘使を
りく。虛実を探しせ。ひよ既わしと如滿い家臣遠親ふ戟せられ遠親ひ又諏訪の神
主蕃田素藤ふ誅滅せられて一郡ひ民安堵せとく支の注進ありし折那素藤いふる
比夷濟の民ひ病疫と黃金水とそ救ひしひ土民の為ふ恐敬せられて。諏訪の祝ふせられ
たるもの支の顛末まで。毎ひ知りあひよ。今又小鞠谷の家臣們ひ素藤の功績を許稟
あて。他をあて館山城主ふ做まくほしと請ふ使者の口狀折言書の趣。東六郎相辰ひ披露
あて。更よもの意をるあひしひ。即便新故の三家老杉倉木曾介氏元堀内藏人貞行
芒刈川兵庫助清澄とも。俱ふ閑室ふ召集て。件のよと評議あり。今来苗小鞠谷の家臣們
ひ請稟を館山の城主の事。那素藤ひ支の趣宴ふ賞せべしといとも。碪砧の石ハ玉ふ似た
て。犛牛の子ハ羊ふ似ひ。賢奸ハまひ知べしひ。他們ひ願ひふ依る。欲意見什麻と問
へハ四家老們俱ふ答て。御諚宴ふ遠慮あり。然りけれども素藤ひ大功ハ世ふ著をて。

心の邪正ハ知るふ由ふ。且那士卒士民們ひ望ふ儘せるべ。その欲異日野心の色ふえて。紛ふ
所真実ふ。ぞいとの折斧鉞を加るとも。オふ一郡一城の三總を併せ。御武畧を御征伐い
輒ひて。今功あるを賞せ。人の議論を爭何ハせ。臣們ハ迭ふ意表を盡て。議しる処
かくの如し。ふ又賢慮を旋らされあらぼ。と稟ふ。義成ひ。頷て。その議宴ふ至
極せり。水清れば魚住まず。人察れば友ふ。とふ古語あるとえれる。我猜査ハ遠慮ふ過
ぎ。快々免許まべれとそ。その議ふ儘しめひ。徒而ふの次の日ふ碗九郎本膳ひ義成朝臣ふ
見参しと。素藤館山ひ城主ひ。ひよりの下知狀を賜りければ。恩を拜し退り出て館山城
投てかひ。ふ後蕃田素藤ハ逆旅の装ハ華ふる伴
ひ。欲びひ。ぐもあらざるべ。ふ
當ふく従へて稲村瀧田の両城へ初参の式礼首尾敕正て。義成并ふ義実主ふ見ふ永の
折贄とまあ。せ幸出物を賜りて。諭しふ示さる。箇條あり。四司の威風四下を拂て。頭を抬
ぐべ。もあらぼれ。素藤憶ま背ふ汗を。礼ふ熟ざる。暴夷の言葉の外所做知ふ。進退

殆困じ〻て。徒而素藤は安房に逗留幾日もあるで。舘山に帰城し。里見の武威に憚りて。その機を攬んと思ひ。ゞ廳南の城主武田信隆長柄の榎本の城主千代丸豊俊椎津の城主真里谷信昭ゑんど陽に里見に従へども陰に獨立の志ありて稲村に住せざりしを。素藤便直と旋らして利害を説き和順と薦るに。豊俊信隆信昭們も俱に稲村の城へ参勤して怠慢の罪を陪話すれば。義成件の美義を妻として草蜢田に當家に忠心あり。とて東西と賜るとて。すれば素藤是よりあるに驕りて。その狀始に似ず獨ほくく思ふ。我計較皆當りて如意なれども。徒に限賢良貌して色も酒も親ざれば。這郡縣を管領して一城の主となるに百計千慮も无益に似たり。料るに里見義実は量義に隱遁の始より政事に関らざるを。又當主義成も素より愚將にあるねども。柔弱守文の後生。然のみ憚るとて。みづから饒して早晩に酒色に樂むに。耽る程に前代小鞠谷如満が愛妾に朝貌夕顔と喚做る。両個の美婦人あり。けるとぞ。侍側室にあるとぞ。

洞房花燭の酒宴快樂に玉を炊せ桂を薪にして。敢財用の費を數ふ。徒に尚厭とせざれば。艶曲歌舞に妙なる少女を京鎌倉に徴め。左右に侍らして。歌ハにも。舞にも。そ酒席の興を添へける。素藤既に奢侈を極めて。民の望を失ひけれども。安房へ寄らせんと思ふに。後安房上総の舊族名家の子孫。民間に零落して。尋て城内へ呼とりて。叮寧に扶持すれども。そも真実の所存なるねば。一朝事時の程を。そ〻ふ。更に又思ふ。當城の士卒們。都て小鞠谷の舊臣。只勢に従ふのみ。商量敵ふるものなし。要緊の時に。憶ハも再會をる。礦時願八平田張金作。俱に武勇に長るものゝ。且その心操も。我に孝順のよりたゝ。旋風三郎苛九郎們と同じかるべ。約束あるにもあれば。悄々地に他們を招とて。郭助に。尋思して。麻墓愚助と喚做て。心ある愚直の一個の若黨に。件の使を吩咐て。密書と一裹の金を。賚して。その地方を誨るとて。那熊谷の

浮雲の富素藤
酒色子躰る
願八盆作剪徑して
舊好の書と得て

頭なる二賊が隠宅へ走遣しける。然バ又礪時願八平田張盆作ハ曩に素藤を留めたる明の朝伏家の頭領井栗苛九郎と桁渡旋風二郎が殺されけるを知ずして、ちち騒ぎて那這と素藤を索るに、他が往方ハ知らずもなく、剰一個の小嘍囉も斫殺されて外面に在り。原来皆素藤が所為なりけりと猜するのミ。逃亡てより既にその時も移りしと思へバ赶着とも及べくもあらず。意に昨夜旋風二郎と苛九郎が迷恨を演て快那人を殺さんとせしをきくもかく知られて這禍に逢るらんと嘆きつつ、小嘍囉們に三個の亡骸を瘞させて、竟に素藤の往方を索ぬれど、僅に又両三総を過る程に下の小嘍囉五名の内中両個ハ熊谷の曠野を武藝に長ある旅客を剥んとして命を殞し、三個ハ亦時疫に犯されて枕を並て死にけり。是より後ハ願八と盆作とあるのミ。野に出て剪絡を旨とするに、有一日又熊谷の曠野にて武家めく脚力もあらん独の旅客を引挟み斫仆して、その懐なる盤纏を略るに金ハ三十餘両あり。又竹篦に収めたる書輪ありしを引出して共侶に閲するに、思ひかけなき素藤が願八盆作に與

る密書也。素藤ハ往歳上総なる舘山の城主になりける首尾の顛末を詳に寫著て、曩に約束せしる事どく和主們我と倶に悪業はもあらず快來て我に仕へよかし。よりて路費として一裹三十金を贈るものぞ。今番その密使する命せしハ麻草墓悪助と喚做るる、その性愚直の若黨なれども、這が口より和主們の旧巣を人に知られなバ我與に為も宜しかれど結果て来るそよけれ、好る洩しそとありければ、願八と盆作ハ憶ず倶に頭を搔て、世話に不求の去向と現人れ久後ぞれの測りがたかるものなる。然とハ思ひかけざりしに那人果して成まるあり。寔に造化なる曩に苛九郎と旋風二郎が云云といひし折、我們ハそを否みて従ざりしを徳とて這路費さへ贈られしを、得ず疑ひて由もなく、もし又後に悔とも及んや。然ぱ那旅客を素藤主の我們を招んとその使を神ならぬ身の知るよしもなく結果けしハ没怪の幸ひ僥倖しき後安ならずや。今いふ下もあらずなりしに近會ハ造化なくて飽まで酒も喫ずかつ仕へて頭ハ芝るとも响馬ぞなるに優まよしあらん。快く那里へ赴くべけれと商議して、宿所にかへりて行装を整

るゝ贈られる金あれば思ふ儘に打扮てゝ連立て上総の舘山を投ていそぐ程に約莫四宿あまりにして件の城に来ければ城主の故郷に在せし折舊好のゆゑ毎に見参を請ふ素藤ありて對面して仕へ元一禄を與へ幾程もなく登用して老黨の上に在らしけり又那麻莫思助が軍身屯親弟兄もるたりのるが郷閭に密使に立られて出てあるを知るのゆゑ逐電せんと思ひ兄その同僚たちが商議して支度をと許しを素藤に知せ負あてさるる沙汰なく寝ぬけり恁而件の願八盆作が墓田の家の冢宰ありしより主の慾を知ざるとなく素藤に忌憚らで養ひ花秋月觀の興に乗じ猛可に土木の工を興して課役に民の艱苦を思ひ又或時は歌儛田樂の舞基なるどを造らんに良材を擇び奇石を集めて費用を肩にかけ怨る故に采邑の租税を重くされどもなほ足らざれば借りて返さぬを云云と許て宥免を請ふ村長あれが素藤呵々と冷笑ひて都て夷濶の民毎に曩に熱病を皆悉死ぬるを黄金水の

奇方にて救れるは誰が恩ぞ又那病疫のとき我はその折金さへ貸て他ども貧病を助て殿西せしに部語ふに雨霽て笠を忘る愚民の身勝手なる烏許の白徒は捕て首を刎よ然るに嗷訴已べ〳〵ぞ忽ちに下知せしに有司件の村長を捕て獄舍に繫がけり是ゆゑ駭いて歎く村長の宅眷莊客は城主の冢宰礪時願八平田張盆作に内縁を求め折に觸て黄白を贈りて只管因恕を乞ひけるに黄白の光はあの折も黄金水とその效なるべく村長は辛くして死ざるとを得られども莊役を免されて所持の田園と家庫ぞ都て没官せられ是より水も飲ぬ垂下の窮民はるくるを憐まぬなりけり然れば城主の非理の徵の素藤は夷濶に在りとある壯客も經紀兒も怨てい故の小鞠谷殿に優りあるとて咲くのゆゑ那某甲の村長に懲りて愁訴を做すものるべく罪せられぬを幸にして世は春ぐる人心憂は秋の如きたる歎息の霧と共に光陰を弥る采邑の民は惨に素藤の心術素藤の表裏

そ稲村なる里見家へは年始の参勤寒暑の音問年毎に怠ることなく且隣郡の城主へも好を通じ人情を斟ぞして最正首に交参なれば此の年来素藤の驕奢の風聲ありといへどもそは内々の事にて逆謀野心の所行なければ敢その非をいふものなく居ること年を歴たり然るに文明十四年といふ夏の時候素藤が愛おもひし両個の側室と唱へたる朝貌と夕顔は倶に時疫に犯されて長沙の術もその效なければ素藤太く駭憂ひて係る折から那神祠なる水を合なり黄金を浸して用ひば必即效あらん例の樹の水を汲合せよとぞ醫師に奴隷を從へまで諏訪の神社へ遣せしに手を空しくして歸り来つ那樟の上なる虚は那の程に欹朽抜けて下なる虚とひとしくなりぬ係る故に神水は一滴もなしと報るを素藤なほ不疑ひて其頭なるにありける近習を喚びて走らせしにあらぬ水なればその甲斐とてもなかりける外の水も優もべき欲とて件の社の頭なる神子洗井の水を汲合せてこれを一提桶を来なれば素藤望を失ひて心のとかく思へども却已べきにあらざれば黄金を多く其の水に一宿浸して次の日に両個の側

室に薦めしに水異なればや效はなくて朝貌は朝開をまたで夕顔も亦勝るべき日影に立枯れて花なき宿となりしかば素藤は左右の手に持る直玉を砕きし似く心悶胸焦れて哀慕の念ひやるかたなきに盃うち向ひても憂ひを帚ふよすがになりしで歌舞艶曲も倒に慰免かねつ三伏の溽暑は既に退きて秋風涼しくなる隨に毎篭でのみありけるが一日悶を醫さんとて両三個の近習をゐて城樓に登りて那這と城下の街衢を看もて程に衆人齊一奔走して物を迎るに似くなるを素藤やがて訝りて那は何ぞと尋れば近習の毎答ていふやう這はまだ聞食れずや他は日者世に名高き八百比丘尼を迎るならんといふに素藤尚あやしむぞそは亦甚なる女僧ぞんと叫びて問へば然ば若挾に一個の老尼あり。うち見は四十あまりなれども人その年齢を問へば八百餘歳なりといふなる因て世の人形貌若挾なれば八百比丘尼と喚做すさなれ年来山蟄して七里へは毎に疎かりしに衆生濟度の與にとて近曾猛可に立出て諸國を偏歷するよしと唱へきるが卑賤渇仰せざるもなく迎る地方に福あり雨を禱晴を祈るに感応灼然なりといへば。

病病久く身に迫りて向死とせしかば比丘尼の十念を受るとたゝ立地に本復を定業に
まで癒りぬ。偶ま病苦を忘れて必成佛もといふ。そゞ中に一層奇しとは人の妻まれ
良人まれ死して七年を歴たりとも哀草の怨ひ切に一番まくほるまるゝを比丘尼に乞
い禀せば。その亡魂と煙の中に顕して過去の事とをゝんなとして過ぎ去る里毎に轎子をとゝそれを
迎へて宿る家と面目を低而件の八百比丘尼は毎日當國に来ませと云風聞果して
搗鬼ゆゑ。昨夜は布善村に止宿あり。今日は這ん城の下の本町に迎るとそ。今朝よりそは
竹えらり然ば目今商る那衆人は八百比丘尼の迎に出るかとゝ素藤うち听てそを最
奇しがるにそ我も欲するはれば今宵はその八百比丘尼を城内へ招じ入て對面まで虚実を試
さんと有司に告示して町人は下知せば快々せとといそぐして躁て城楼を下りけり。介程に這
館山の城下なる町人は那活佛を迎んとて迭に競ふて立出るに猛可き城主の嚴命あり。比
丘尼とゝ城内へ倶しまつりせとと下知せられ衆人齊一呆果てゝ何麼いふとゝそに

それ〻に限りなけれども。鄙語に云ふ嗤兒と地頭に克んとはそれ〻そゞ佐比丘尼の轎を
城内へ舁入れて。然而役人に遞與けり。現奇を好む人心耳と貴と目と賤める。這城内なる老黨
若黨淺水碗九郎。奥利本膳は雑兵奴隷に至るまで。昨今知る比丘尼の法
験誰か疎鹵に思ふ。皆恭しく相迎て躁て客房まで共と薦め果子もてなす非時料
理の管待いまゝ夾ふ近習は。ゝ主の素藤に件のことを報しゝ奥まで對面まで
獨閑室にて暫の程に姑且して八百比丘尼は両個の婀娜に案内をせられて素藤の身邊に
来ぬと。それ〻人の噂に違ふ齢千歳に近しと。鄙語に云ふ虚詐八百狐面白く形瘦て雪を
載する呉竹の嫋やかに危うき眼涼しく眉秀て開後れる秋の蓮の馥香ありそれ艶なる
身に白綸子の夾衣を着て黒紋蟬羽像紋の紋紗の法衣に錦の袈裟を被て世
一箇の尼法師年来深山に在りし身の低晴がましき打扮に偏歴の折施主に寄晋
けんと猜れば亦怪むに足れども今更のに覚ぬ。目衛にそゞ程に比丘尼は躁て儲の

席に着んとて素藤に揖をとるに、執ねて数珠を繰に凡線るのを又ひともとりけり。登時
墓田素藤と八百比丘尼とは当城の主素藤と弓箭合る身へ。
武勇の外に佛の道に疎けれども法験耳に聞て渇望の思ひ止ることを幸ひに我城下に
室駕を枉らんと申さば猛可に請待をるべし。身は女仙狩観自在狩齢い既に八百歳の
久しきを保ち衆まより世の人稱て若狭なる八百比丘尼とは、あまねく世に不老
不死の仙術に学ぶとも速かにてもあらんぞ。寿命を欲ひなば迂遠くて即效
なきを時に今出来秋を来品豊年の時なれば雨を禱晴を祈る奇特も亦今茲を要
に只願くは世を去らん我側室に仕へまくれば甚麼その術あるべしやと問へば比丘尼は黙
頭て原来支皆人倍に奇特を知らぬ我法名は妙椿とぞ世の人通て八百の名称
肩せしは玉椿の長生を尊ぶ故なれば九百に為ん折名を更めて九百比丘尼とぞ呼べ。然べ妙椿
と喚るべ。穏當にそ侍るなれ左なれば右もまた世に異人を幻ふ方士の術にて佛の

教にあらねども我身深山に在りし時料ぬ異人に傳授せられて稀に人に施す。相公の尼
まく欲りしあらんの比時疫を共侶に世を去らんる。那朝貌と夕顔の刀自達に伝へ。今
宵准備を做しめ給へ。と易しとぞ意表を透徹を奇瑰の猜詐に素藤驚
且歎じて云ふ。准備は何なれ整へん。諾と請問へば妙椿答て否修法は然
去ることも侍らぬか。奥まる一室の内に戸帳を深く垂て竜で机案に一箇の香爐を措
くべし。侍て更闌る時候相公は左右を遠ざけて獨その一室に御坐れ。今宵丑三時候ふ
那美女達を呼せまゐらせん。深信を肝要なれ。素藤怡悦に勝ぬ然らばその期に
なる程あり。姑く緩坐を乞。更に別室に席を設て郷食饌叮寧にけれども妙椿推辭
ヨマくこうべを法衣を脱ぎ枕を乞て傍に人の寝ぬ久しく熟睡をこうける。

作者曰俗に若狭の八百比丘尼はその虚実詳ならぬ按ずるに奥羽觀迹聞老志（巻第十 磐井郡）
九に云若狭国に白比丘尼と號する者あり其父一旦山に入て異人に遇ひ與俱に一庵に

到れば殆一天地而別世界也其人一物を與て曰是八人魚也これを食へば年を延て不老と
ふ父撫乃て家に帰れば其女子迎歓びて其衣帯を取り因て人魚を袖裏に得たり乃
これを食ふ。蓋内芝の類歟女子の壽四百歳世に所謂白比丘尼是也 原本漢文今假名を録す。又諸國
里人談（巻第三山野部）に云若狭國小濱の空印寺に八百比丘尼の住し処則御影あり側に洞穴
あり其奥限りを知らず土人云當寺五六世已前の住持その穴に入て奥を揺るに三
日を経て丹波の山中に出たりと。相伝ふ女僧あり其処に住り齢八百歳にして其容
貌十五六歳の壮美なりて八百比丘尼と稱し里語に云此女僧八人魚を食し故に長壽
なりしとぞ又塩尻（或問帝王謚篇）に云若狭國八百姫明神（俗に乾京と云）何の神の子を答其社記の
詳なるとゝなれども古事記に大年の神の子羽戸山の神大氣都比賣神城
娶て若沙那賣神を生めりとあり蓋此神歟と云へり。耳老志に白比丘尼と壽
四百歳とあり然と信景翁に八百姫明神の名とゝ熟ら知ねど原是齊東

野人の語なり。虚実の詳なら所なくの如し頃ふる件の八百比丘尼に唐山の小説に所載の八百
亜流なるべし今この編に但その綽號と洞穴のみを借用るのみ洞穴の名に下回に不尽
寓言とゝ。本づく所ありて看作者の用心を知るべし

却説その日も暮れぬ素藤に先近習に吩咐て奥なる小室を掃帚に戸帳を垂て
燭臺机案香爐などの准備なるを敷設ければ八百比丘尼を吸覚て夕餐を差ゆ。
姉嫁に遣せし件の比丘尼に熟睡して呼べども喚べども覚ざるに左右に程に更闌
子の半ばなり素藤焦燥且疑ひてみづから其首に赴て喚覚さんとせし程に妙椿も
尽く睡の覚て水と乞ひ嗽ぎて引れて出て来ければ素藤やゝと喚近着て安堵の
期に及ぶ那時まで名を言ずして久しかりしと嗤ひ笑て惘りのみ脱落い
ふ准備の一室倶に奥とゝ素藤怒を復して卒とゝ遽く身を起して
先に立て一室に赴き戸帳を掲て程なく処に坐を占れば妙椿も後に跟て来る机案に對て

文奎堂藏

文奎堂藏

懐より香一裹を出して香爐なる火を搔起し口に咒文を唱へ給へば。徐ろに香を焚らまれば。
怪しむべし左右に植る銀燭光を失ひて朦朧たる隨に馥郁として立升る烟の裏に忽
然と顕れ出る美人あり但見る長短那身に稱ひて材昂らず低らず顔は三月の櫻花の
吉野の山に殼香に如く眉を仲秋の新月の赤石の浦に似る小町態なる細
腰を風に靡く楊柳も及ぶ衣徹像る素肌は龍腦の珠玉を延ん輝れる哉玳瑁の
櫛子花あり蝶あり白銀の釵兒解ぶ身長に餘る黒羽卒の雲鬢臈闌たる綾羅雜の
袂に目に赫爽て陸奥山に黄金花開く錦繡の裳に地上に曳て龍田の川に丹楓葉流る
秋波眄ては愛敬溢れ蓮歩輕くて羅綺に勝ざるべし千金擲つに厭ざとへども玉音
に耳を聽くとなれば神邪人邪妖幻邪正に是沈魚落雁閉月羞花の姿年二八の一佳人今
日を看て初て知る盛短は朝貌に果敢く凋む夕顔に夜光の前に燕石に比ん正鳥鳳の
傍に鳥雀に比と羞思に素藤に魂浮れ心蕩けて狂ふ像く美人の側に傍と寄せて

抱き住めんと欲程に合に合れば煙と共に形は滅て忽ち素藤に成る我に
復る貌を急に改めても尚疑ひの解ざれば更に姿を優
たる身の妙術久く滅る我胸豁けて一霎時は慰められ
ども我亡側室朝貌と夕顔と比べて他の両個に弥増る美人を見せしは甚麽の故
今の世に像の如き少女あらば何を歎く非除朝貌夕顔に存命て左右に果るとも他に
身の暇を取て去る少女を妻に迎ん恨らくは然る美婦人を希ふ人の辟言に再は
美女を親て漫に胃を焦す果敢に慈を轉て又更に思とその所行る秋事情を
聞ば教ゆとて妙椿鈍とて妙椿鈍に
愛特に深る李夫人早世に歎く武帝は哀某に勝玉で今一度李夫人と逢
ものと歎ぜ方士李少翁に慰めて返魂香を焼く煙に裏る李夫人の
姿權且顕れと帝親く寄て歎て倣り詩に是邪非邪立く

望ハ偏に何ぞ姍々として其來ることの遅かりけると誦しぬといふ乃これを樂府に命て絲竹に合し歌せて思ひを慰めましとぞ前漢書にハ見えたりける又唐の玄宗ハ馬嵬原にて軍兵們に絞られて亡かりし楊貴妃を其魂なりとも見まくほしと思召す叡歎をいかで慰めまゐらんとて四維公遠が幻術もて又楊貴妃を煙の裏に見せまゐらせしと云小説あり虚実ハ安定ならねども非除然るものありとても死したる美人を幻に見んハ相想ひを増んのみ宜定に益なき所為なれバ今宵ハ故意那両個の側室達を見せまゐらせぞ世に在る美人を見せまゐらせしハ娶るに便りあらん與へ侍ても疑ひなき欲と解諭されて素藤ハ肇て夢の覚るごとく幾番となく點頭て適徴妙なる善巧方便あらバ今宵見せられハ那里の人の女児ぞや願ハ示しあひそと急迫しく問ハバ又うち笑て俗に云燈臺下暗らしぞまで知召れぬ歟件の美人ハ安房の國司里見義成主の息女也濱路姫と喚做したり義成主に女の子あまたあり件の姫ハ第五女なれバ五の君とも稱られたり仙化折果都就島に捉られて生死存亡を知よしもなかりしに遠く甲斐の峯に

ありしを那里の民に救れて鄙に生育ありしが命運愛たく去歳の冬甲斐より故郷へ送られて還らせ給ひぬと傳へ云り憑れバ去歳より稲村の城内にこそ在すめれ那晁就島の殃危にて痛ましや民間に成長りし女なれどもその進止鄙ならず且容止の美しき胞姉妹達に優りて千里眼もて洒家ハ認りぬ因てかれ身に薦んとて聊術を施しなバ好氷人もあるべしなど取せりと哄誘せしぞ素藤憶やも老少鰥雖して噫欽し嘻愛して件の美人ハ外ならず里見氏の女児なりしバ我ハ國主へ孝順之昔年野心の城主們を歸服させしを忘れハせじ憑れバ姻談成就せん歟と思へども當時我身の齢良傾きて既に四十の數に入りぬ年庚相応しからねバとて嫌れなんも知るべからずと思ふを妙椿推禁めて若き賤妹伕の縁しハ産霊の神の所為としるなれバ年の多少に依らぬものなり況や相公ハ尚若くて三十なりと見えまするに沾このふところへと慰められていとど益く空悦びの餘念なく閑談に天の明るを覚えざる此の事成就せん日まで商量敵にせまほしとぞ是より妙椿を城内に留めて敢外へ出さず婀嬢毎を侍らして管待大かたならざりけり。

第百一回　老尼計を薦て舊祠新に葺る　逆將人を樹にして公子衞を喪ふ

却說蟇田權頭素藤は。濱路姫を娶んとて。そが氷人をえら擇むに。その人を得ざりしに。有一日同國長柄郡榎本の城主なる。千代丸圖書介豊俊が。重陽の祝義に稻村殿へ參勤せしとて。伴當居多從へて。館山の城へ立寄ければ。素藤歡び對面して。盃を薦めて迭に無異を祝しける。語次に素藤は。豊俊に悄語くやう。言卒介に似れども。某已に志願あり。願ふは賢契を煩さん。甚麼承引あらんやといへば。豊俊聞てそは何事歟知らねども。曩に和殿の教諭により。割居の思ひを轉して。里見殿へ歸順せしより。今に至て後安く。城邑無異の歡びあり。それより以來好を累ねて。年來疎濶ならぬなれば。一臂の力を竭さでやは。我身に稱ふ事ならば。何事まれ承らん。快く示しあれといはれて。素藤うち含笑て。そは憑しき事にこそ。然ばわが意衷をうち出さん。某久しく娶らずあるは。良縁なきによりてなり。索に里見殿の第五の息女に。濱路姫と喚做ものあり。他は折就鳥に捉られて。甲斐國へ將て去れしを。那里の民に拯れて。民間に成長りしが。去歳の冬人に送られて。故鄕へ還ることを得たりと。或日ある人の噂を聞き。是正可に國主の女兒なれども。薄命にして民間に年來を歷ぬれば。大諸侯は娶るべからず。某は又下民の情に通ずれば。妻を求まく欲りす。願ふは賢契我與に。這赤繩を繫ぎなば。餘義もなく憑しからんといふに。豊俊沈吟じて。そはいと易き事なれども。婚縁の事は智辯も用ひがたきあり。況某は世才なし。心もとなきながら先那里の四家老に談して。可否を試ん。老黨一名を某に隷て。稻村へ遣しなば。尤便宜にはあらん。有繇の答はその人々に示して還しけんといふに。素藤點頭て。宜趣ある理なり。家臣奥利本膳盛衡并に淺木碗九郎嘉倶と喚做ものは。曩に稻村へ遣して。義成主に見參させつれば。今番も又件の本膳を遣さば。面見知りのあれば遽しく。本膳を召よせよしと示して。豊俊に引汲し。千代丸殿に從ひて。安房へ赴くべしとぞ命しける。要談既に果しかば。豊俊は倚難を憚りて止宿せず。御家臣は一日半日後るゝとも。路にて迨ん。いそがしきと期を推して。告別つ伴當を倶して

安房へぞ赴きける。尓程に素藤は礪時願八平田張盆作淺木碗九郎們を召近着て件なりしを甚しく示せば大家倶に壽きて其歎しきのなきは國主の與へし功ありて相公の御所望あるん乗那里ゆも異議あるべからば縁談既に成熟して里見殿の婿になりたまハば錦の上に花を添る當家の繁昌疑ひなし。快吉左右のあれかしと只管稱て已ざりけり係りし程に奥利本膳を行装を整て伴當をねて豊俊に赴着んそ東西を定めて安房を投てぞ急ぎける。這日又素藤は八百比丘尼を留置く離根亭に赴きて榎本の城主千代丸豊俊を媒妁に憑まする。支度をと報知して我は里見に大功あり月先も亦その人なれば婚姻必成就せん尓女菩薩の引接を美婦を取せる歟びと査し兔と説誇れバ妙椿頭を傾けそれ然る所因もあるべきか。吉凶いまだ知り易からず尚成らずば又別にせん術もあらんか。空歟びをするなとひそとらるに素藤與覺て又なにもなかりけり是よりの後素藤は稲村の吉左右を今日歟明日歟とまち程に約莫五七日を経て奥利本膳は稲村よりかへり来て素藤に報るやう御所望の一條を。

千代丸殿の云云と骨を折りあらしかば吉支度整ひ里見殿の宣ふやう素藤拙なを所望の事。いかにせん障りありて婚姻は人の大礼再あらず死のあれば迭かなくその門第と年庚を擇むべし蟇田は京家の人といへども本由貴家系詳ならば我家は清和源氏大新田の嫡流なれバその門業相応しかれ且素藤は初老の人我女兒濱路とハ二三十歳の長短あらん係れバ年庚も相応しからぬ只這障りのあるのみぞ濱路ハ四個の女兒あるその中の所縁を卜ぬるに女兒を超て先他を人の妻に做もとあれハ順逆の理も亦錯てあるべきをも那人の需に應じかたく候らひとのひさしきあれどもいかで推辭ば疑非いとの義を以左も右も宜く傳へたまへと仰られしとぞ千代丸殿もいかにぞの狭胸苦しく思ひのへど右のごとき首尾なれバ思ひ絶さぞあらねと稟せよとて某の身の暇をたまへり豊俊主もその月下旬に榎本へ還りなんと云ふと素藤ハ皆忽地聲を荷立てそれ安からぬ事あるもあれ人の時運盛衰あり里見も初ハ安西が食客なりつ發跡て山下を討ち麿安西が所領を奪略しかばこそ我も亦小鞠谷の賊臣遠親を誅戮して衆に推されて當城の主になりつるその義その勇誰か甲乙あるといはんや

これども領地の大小あり。勢ひ同じからざれ。權且他が下風に立て。廳南椎津榎本の三城主ども。野心を諭さ。稲村へ參勤を薦めしよりけふまで上総に無異なるに功を賞する心もなく。獨みづから昂然たる態。飽まで我を辱めさせる。這奴が廣言のいと憎さよ。いかでか敵国に本膳並に近習ども慰難て共。侶なれば理りなれども短慮に功を做しなば。里見殿に介ざるは宜ばかりなる。是亦知るべからず。徐に計らるべしとかたるく諫るに。素藤は心もせず。童扈從が力を合せて。離根亭に赴て。妙椿に件の趣を告て。亦復罵るに。妙椿急に推禁めて。噫と無もなく。今這里で飽まで罵りのみなるべ人に知れて。説言の媒にあらんのみ。支尋常で整ず。智とて謀りて。本意を遂え。左右と遠さけのみまで。とかに素藤目を注て。童扈從を退くに。亦復妙椿さうち對て教諭の一言愚意に悔なしの計畧は甚麻なるに。向へば妙椿聲を低めて。然ばよ。聞る里見義成は嫡子と。太郎御曹司義通は今茲甫十歳。明年の春正月に鎧の著初あり。と風聲を就て殿臺の頭なる正八幡宇佐八幡諏訪の三社を修復あるに。未の功といそぐ。今茲十二月に落成せば。稲村へ訴て。初祭を請ひ奉る。安房にも亦八幡の神社多ければ。這里なる両社と諏訪明神は。鎌倉將軍の時勧請せられて。源家に由緒あり。偖れば義成は。その子の社參を諾はん。義通の地に來ぬるを及びて。伏兵をもて擒にせべし。その計較は箇様々々。恁々の機変を。旨を勿論童子のみなれば。四家老の内中。一両名守護して必俱して來べし。杉倉木曽介氏元は齢七十に餘るとして。偖る伴は徒べ。堀内貞行東荒川も。智勇凡庸の敵なるまじ。他們は機密を知られざるの期の要文料にかりそめ亦老尼が術あり。その餘の多段は恁々と。箇様々々と。其公示せば。素藤膝の找むを覚て。満面笑々。点頭て。神出鬼没の妙策なるべし。その伏兵を用ひん。諏訪の社頭の老樟の虚にて。完竟なるべけれども。先走の伴當は。平何はせん。そも亦老尼が所存は。期に及び怯るべん。却義通を生拘て。這城内に閉籠置て。義成怒て。多勢を率て。當城を囲む。攻むべし。防戦難義に及ぶも。義通を細めて。城楼に登り。敵に示す箇様

箇様に喚ぶ。寄るい都て義通を思ふの故ふ笠間も放ち込む。銃丸も飛さそ攻撃ふ不便の勢こ折けて向容々と和談ふ七及ぶけれ。その折ふ思ふの隨ふ何れ那れ誓盟て義通と引換ふ濱路姫を受取るべ。支十二分の利運を是より里見の武威衰へ上總を略し安房を降して地を房總ふ用ゐるの企及びくれふあるを先那修復とのそが必期ふ後れてふ要るふと胸逞く吹入む毒氣を素藤諾るの且感じ且歎びて別談ふ及ぶ。次の日光黨願八金作本膳碗九郎と喚取水合て三社修復の計談あり。両所の八幡諏訪の神社い頼朝以来の霊地るるふ頽敗既ふ久しく至れり。宜く村長们ふ課し速ふ修復せべ。就中諏訪の神社ふ神水の奇特ふ有て千百人の病疫の必死を救れ神徳あり。又正八幡い普善上下の村人们ふ城隍神ふ富民い財を乞ひ寒民い力役て力を勤め労を厭ひで修造の功を果せべ。倘ふ言ふ従ひで怠の不便とらのあ捕り音を刎て後の私論を箴むべ。願八並ふ金作い件の作事の頭人とて我郡民们ふ知を告へよ。落成い年内を限りとて功を果ねる。

思ひそと最も緊しく吟味れば大家異議ふ言兼て躰く夷濤の郡民ふ下知て土木の工を興せ。催促火速ふけれ夷濤の民们い驚愚して推辭んと欲ふれ罪せられんを怕れ又従へと欲ふれば年来重ね租税ふ労れて財用早ふ敷乏ふ吉ふの難義ふ逼れば命ふ捨る課役と思へば領主の酒色の奢侈の與ふ責合るるる錢財ふもあらば地方ふ散りて八幡諏訪の神社を修復の課役ふれば是切てのるるる者いるけれど頭人願八金作い已ふ得ふを欲ぶ。吉ふ假托け理を非ふ枉げ難義を課るるるるれば民们いふれふ亦困て。その虐を免れんとそ件の両個の頭人ふ人情を屡ふ出銀隊の帳算ふ倍て一郡痩ふけり。任ふ一程ふ女僧妙椿い有一日素藤ふ別を告て那計畧の趣い後々のふ段まで送るく示ふまゐせふ老尼ぶ這里ふ在んい要る。然るを尼這留せば人の怪むともあらんふ身の暇を賜へかり機ふ臨ば又ふ身を邦助て支十二分の勝利とるもべ。よくあるべと悄語て素藤ぶ林ふを亭を聞ぶ。飄然と立出るふ信

たゝえて往方も知ざるまでに単表両社の八幡及諏訪の神主们は曩に小鞠谷如満に神領を
滅却せられしより各他郷に離散して年来を歴しかゝれば今番当領主の沙汰として二社修
復の幸ひあり神事も旧に復さるゝとの風聲遥に聞えしが舊記を抱て共侶に殿宇
かゝる時隨便素藤に愁訴して舊職再補をとゝけるに素藤豫計較あれば舊記を考
へ虚実を糾して件の三個の神主に此の神領を合るゝ職に復して昔のごく祭礼を執行せ
ばと命じける左右する程に這年（文明十四年）の冬十月の中浣に至りて三社の修復落成なり丹
楮の玉垣白木の雛栖も壮厳昔に及ねども神威は有數に光を増て最大尊くぞ見えける
見ふるに素藤は件の三個の神主と老黨浅木磯九郎と稲村の城へ遣して國主義成朝臣に
告るやう素藤が領る処の殿宇の頭る両所の八幡大神宮並に諏訪明神は昔鎌倉の
右幕下頼朝卿の創立ぬ源家に由緒ある大社なりと先代小鞠谷如満が神領を没收
あて神主を逐ひしより三社倶に頽破して年来に及びしが素藤修復せまく思へど年々

財用足らざれば亦復居ずの年を歴て稍再興の功を果せり偖れども恣に奉幣の義を行ハ
ざる件の三社は素藤が住邑にあるゆゑ原是源家の氏神の願ふに國主御糸詣すべくて
奉幣の義を行ひあるべき鎌倉将軍の先例に稱ふ神慮も感応あらん三社の神人舊記を
捧げて請なる事右の如し這義御許容あらばいと舊例を援ひ意見を演て社糸を薦
め禀ぬるが義成これを聴あひてその然るべき大々なるべき件の三社のうちも我豫より所知なり宇
佐八幡と諏訪の神社はむかし上総介廣常が鎌倉殿頼朝のために與ふとて建立あるる舊社
介後又頼朝の沙汰として同處に鶴岡の正八幡と勸請あり一ようれば當家も尊信を
ぬ神宮なるに勿論と明年正月十日あり嫡子太郎義通を糸詣させん然らば先祖八幡殿家の義
三社へは義通を糸詣させん然らば先祖八幡殿家の吉例に相稱ひて我兒の武運を祈る
方あり因て正月十五日を社糸の本日と豫定して程を料りて出遣べし。その折に古例を尋て
神田を寄附せべければ先その旨を存ぜべ但童子のあるれば館山へ立ちて出ぜ。その日詣く

その日ゆ退く。社参のまゝ旅亮れば。郷食心の儲まど必是を用の所作と見なのうを權頭ゆ。
伺へよと言示して。三社の神主と碗九郎们ゆ牽出物を賜そ。館山(還)ゆ。
稲村の首尾什麽ぞと思へばのまゞ胸安らゝで碗九郎们が還るを待ゆ四五日ゆして浅木碗九
郎ハ三社の神主を相俱して稲村ゆ來る。即便主の素藤ゆ國王喜悦の支の趣明
年正月十九日ゆ嫡男太郎義通ゆ詣させんとのられ。箇様々々と報げゝ素藤斜ゝ
歓び。肚裏ゆ思まゝ。八百比丘尼の計る処果して毫も差ふとなき。義成ハ参詣せで。元子義
通を遣ゝ我圏套ゆ入らるゝ。然ゝば先籠城の准備をせまゝあるべゝと。翌て老黨願ハ盆
作碗九郎本膳ゆ件の秘計を具に示して悄々ゆ城内へ戻り戰米を倉入れ。矢種を貯へ焔硝を
買せるゝて。那期を遅しと待ち受け。徒而今茲も果敢なく暮れて。明れば文明十五年癸卯の
春正月十日。毛野道郎が鈴茂林の復讐と。同年同月之但し日子同じかるのゝ。あの日稲村の城内ゆ里見安房守義成の嫡男太郎
御曹司義通の鎧の初櫻の祝義ゆ又上總る。館山の城主墓田素藤が去歳の冬くゝ

萬禦ゝる同処殿堂ゆ頭る。両社の八幡並ゆ諏訪の神社へも詣て奉幣あるべとて。十三日の
朝巳の時ゆ御曹司發駕と。ゆえゝる第一の伴長。老黨堀内藏人貞行並ゆ杉倉木曽人
氏元の長男。杉倉武者助直元。姉母夫小森衛門篤宗小傳浦安兵馬兼勝。近習田税力
助逆友廿日ハ八郎景能這们を宗徒の従駕として。侍品三十名。雜兵三百五十名。長幹の槍
三十條。弓三十張。鳥銃三十挺。無馬十疋。小荷駄二十疋。醫師二員。宰領の雜色十名。今
番と晴と打扮る。前駈後従の華美ゆ上總を投てぞ俱しくゝ。去向ハ隣國ゝるめゝる。
皆是里見の封内ゆ入れば心安ゆゆ。されども義通幼少ゆ。究竟の老黨若黨を多く隷
られるゝゆ。因て當時の地理を攷るゆ安房國長挾郡稲村の城。その地同國安房郡長
須賀と距ること一里許。とはゞも今その古城迹詳ゝ。却長挾郡稲村ゆ。上総國夷濱
郡並善村ゆ赴くゆその路程一日ゆ易ゝ。先稲村ゆ數里ゆして。天
津ゆ到る。天津ゆ濱荻濱荻ゆ内浦内浦ゆ小湊まで。安房國長挾郡へ件ゆ

浦ふ送誠と喚做す嶋あり。殺生禁断の地とふ小渓ハ日連誕生の古迹なるゆ世の人の知る処
なり。さてこみなと。然而小渓より市ヶ坂ふ到れば這地方を房總の封疆とす坂を登れば上總国夷灘郡ふ
属せる市ヶ坂より壹宿上野勾屋山田鰕山最上坂大樟羽賀館山小幡普善施ふ作る。今ハ布
是之則安房の天津より上總の普善ふ赴くふ路程十里有餘とハ稲村より赴くとも
十二四里ふ過ざるべし。されども羽賀館山の間山路険阻ふして且岐路多ゆ尚獨行ハ
なく土民を央ゆて鄙道ふ做さるれば迷ざるのみなと稀ハ因て羽賀館山を過ぐ大樟
より新戸と喚做す村落ふ赴けばその路頗遠しとハへども岐道の迷ひなるべ。あるとも里見は老
黨堀内杉倉小林浦安仁勝ハ相計ひて羽賀館山の山路を過ぐ大樟より新戸
へ俱ふ義通幼少なれども一日七里ふ過ざれども首途の次の日四日。ゆゑなく新戸ふ到り
ゆゑ其里ふ一宿人馬を憩へ。本月十五日の早朝より三所の社寮あるべしとも伴當ふ徇示しつ
間話除般ふ却説義通御曹司ハ居まの伴當ふ俱せられて正月十四日の未下刻既ふ暮く

上總なる大樟村ふ来ゆ程ふ忽地騎馬の青侍あり。稲村の城より走り来て御曹司の後
陣なる堀内藏人貞行杉倉武者助直元ふ報ずらく昨日谷子御發駕の後堀内主の令政ハ
持病の積聚暴ふ發りて鍼灸葉餌の驗なく昨夜身故りぬ。又杉倉主の渾家ハ
昨夜難産の恙あり辛くして生れる赤子ハ則死胎ふて産婦ハ幸ひふ免れぬ是ふよりて御
沙汰あり藏人並ふ武者助ハ服穢産穢の障あり。社寮のあん伴ふ連べ當職を衛
門篤宗と浦安兵馬兼勝ふ相委れて速ふ退去なるべ。勿論貞行ハ妻ふ親類ふ
忌服を禀る者ゆ伴ふ在るべ貞行同断なるべ。とあるあん下知のあん使ふ来ひ各々兼
知あるべ。と詞急迫く演述て杉倉武元荒川清澄東辰相ハ連署の奉書を貞行
直元ふ遞與ゆ両人俱ふ為ち敬馬ハて慥ふ便人を走らしてふ
森衛門浦安兵馬ふ支使を告ふけり。這時御曹司義通ハ大樟の村長許一要時人
馬を駐さゆて小休の折ゆりければ小森浦安の両伴長ハ御曹司ふ近ひて後陣ふ

き
来ふければ貞行と直元ハ稲村より到来あるる奉書と篤宗兼勝ハ[illegible]
慮の服織ふるそ快立かへひとある。兄下知既ふかくの如。ある本意ふ[illegible]神事ふ
まべちゝ及ぶそ和殿ハ守護の大任ふ在り。這地も御領ハ[illegible]
ろるのひとかゝとのふ篤宗兼勝ハ異説ふ及ぶそ諾ふひて卑職ハ不才ふれども忠義ハ人ふ譲
るべくも思ひそ。ん伴の美ハ心安ふれ日夜の侍備由断ふく西三月の程ふて御帰城ふ既ふ
快々退りあひとのふ貞行直元ハ各々服織ふ憚りて御曹司ふ見参せそ其首より躍
引返ふ貞行ハ妻の親族も四五名伴當の内ふ他ハ忌服ふ係るとて貞行直元
と共侶ふ辞ふて稲村へ還るそ侍品六七名再伴ハ四五十名ハの折猛可ふ減ふけ。恁
程ふ稲村より騎馬の使ふ立られる若黨ハ鮠内無禾四郎と喚做ふ。家老録の番士
ろるふ貞行と直元の兼書と受とそ在下ハあのうしとふ安く注進ふべ[illegible]
ちて馬ふうち跨り鞭と鳴うて。稲村を投てかゝ去りうべ召返さる毎ハ今ゆうふ路次
いそぐゆくふ堀内貞行ハ妻ハ去歳より積聚の病着ふ臥てあり。然とそも昨今身故ふ
べうハ思ハざりふ折ふりとて嘆きるのゝ又直元ハ妻ハ懐胎ふ臨月ハ仲春ふんふ一月ふ
やく生れる死胎とあれば本意ふ違ひて只その妻の恙ふ切てものふ思ふ[illegible]。徒而件の
人々ハかゝるゆく三里許既ふ暮そ日の暮れかゝ其首ふ歌店ふ投めそ次の日稲村へ還り
け。話分両頭。扨程ふ墓田權頭素藤ハ豫の計畧その圖ふ當りて。今茲正月十三
日ふ義通の發駕のゝ豫その守えあるふより先秘密使とゝ。路次の動静ふ探ふ
その者十四日の下晡ふかゝ来り。扨も今番義通の従駕の士卒二百四五十名倶ふ幼君ふ
守護ふ。今日未下刻大樟村ふ来り折稲村より騎馬の使あり。伴の老黨堀内貞
行ハ妻ハ身故ふ杉倉直元ハ妻ハ難産の由ふ神夏ふ従ふ[illegible]召還されぬ。
又那老黨ハ[illegible]貞行ハ妻の親族も今乗番の伴當の内中ふ在り。他ハ忌服ふ係
るとりて。身の暇と賜りて大樟村より去される侍品六七名あり。そハ再伴ハ[illegible]後陣ハ

あくまでうるさいと報ずる素藤欽びの色を憶ずも額に加えて。そは又沒々死造化なる。八百比
丘尼が別に莅て那四家老は智勇あり。義通に倶して来る。支の障りにうるのやせん。奇
術を以追退けんとられしうの果して違ぶぞ今宵諏訪の社頭なる大樟樹の朽虚に
内に精兵を駆置て明日社参の折義通を擒にせんと勿論これも多勢をもせば。
前驅らの伴當ども出されて支の難義にうるのやせん。然ばとく小勢をもて左右を拉ぐに
便べ。にうるまじきと思ひ難て獨肝胆を摧く程にうるや黄昏にうるー時候城内をうち巡る雑
兵ども許あり。その支極めて奇怪也。城の東門の樹下に大にうる洞穴猛可にうるぞ。そこの深
さ計りかたし。因て先試に潛り入りぬ。奥は最廣なるく。諏訪の社木の大樟の朽虚の
内に續いたり。怪れば。這城内より。那木虚中に到んと。地道の往還自由に不思議なるにうるは
ぞと。生るに素藤驚いて。且欽びも大なるぞ。是も亦八百比丘尼の我宿望を資にうるけん。那術
なると疑ひ。いでくとられしうも。両個の近習に燈燭を秉らしてみづから走り出て。件の洞を検

もるに。その然に違ひなく速に隊配して。這地道より一百人。又外面より二百餘人。内外一度に起
て。義通の伴當と一個も漏さず數を捕るべ。我も亦地道より那社頭に赴て親小冠
者と金内ぶせんの餘の支の箇様々々とその進退を定るぞ。礑時願八平由張金作浅木
碗九郎ども首として。士卒齊一勇立て。各准備に為まうけ。休題再説這夕御曹司
義通は新戸に到着まの入れば。村長の家に旅館に為て。明日の社参の准備あり。その折春の
日はまだ暮ぬ下晡なりければ。伴長小森篤宗は浦安乗勝と商量して。支熟々老兵戍
殿基の頭へ遣して。先那三社の光景をもて。那三社の頭や
最大なる松杉あるに。就中諏訪の神社は十抱許の大樟にて。その幹朽虚にうること
宜に稀有なる老樹也。内は數人を坐らしめべ。と報ずに篤宗乗勝は聞て眉を蹙
あて。まづは明日御参詣の折その樹下に雑兵を立て非常に備へべ。御封内なるこそ
館山の城主は譜第にあらず。今の世の人心料りがたきに。これは只小心にあらず。非除野

心の者いるとも。公る老樹の朽虚などに毒蛇の隠れ住むとあり。迷うくその意を汲みそよ
と。その夜士卒に御示せと。思慮ある壮佼雑兵们に安泊に熟て諾ぜ。當國久く静
謐なる那里に野心の毎あるん。況件の社の頭に毒蛇をどの栖むべもあらじ。その用心に過ぎ
たりとて。あざと笑もまろけの。是なる先に素藤が館山の城へ。老嫗奥利本膳と
新戸は旅館へ遣して。美酒佳肴の人情あり。御曹司到着の賀びと演ぶる小林篤
宗對面して。その来意を鞫るに本膳答て。然に素藤宿望虚にかで。御曹司の
遠く来りて。立社へ詣ぬ者。面目何ぞ是に優ぎ。今宵御旅館へ伺候て見参せ
ん。思ひ沙に折ふ風寒に冒されて。昨今病臥の為体。失敬至極。旨足に非ず及ぶ。旨足に
陪臣奥利本膳とぞ。路次の安否を拜問の輿謹で獻芹の愚衷を表せり。本膳を
留置れて。明日御同道ぜられよかし。路次の敬言固に未明ぞ。士卒とまく出もべ。願ふを
かへさに駕を枉られて當城へ立寄ぬべ。と言せとの義に。かたるく演ー

かべ。篤宗これをうち聞て城主の好意まことに過ぎて。遽莫今番は社参のそ。公子幼少なるに。
外へ立寄りは人と館義成とぶの隊厳命あり。且清道のうるさも。伴當まくいべるの笑も亦先
益に似ぬ。那立社へは伴當は案内の者もいべ。和殿と労をかは及ぶべ。旨足我们は私議な
らぬ館の御詣ぬいべ。是なるべ。と御主人宜く伺達あるまは。れ御親切の趣は後刻披
露仕ん。快く退のゆ。とのそぎ立て従れば本膳は強難て伴當と拒てその夜は館山の
城へ還りけり。恁而その詰豆御曹司義通君は烏帽子狩衣束晴せかは轎子かちに乗て新
戸の旅館へ立出べ。老嫗黒小森衛門篤宗小博浦安兵馬兼勝近臣田統力助
速友廿古屋八郎景能们ゆ。侍品二十餘名。雑兵都て二百餘名。前後左右に従て
先殿臺の頭なる正八幡の神社へと。倶ーまるべ。程に又那奥利本膳は十字街衛の
雑兵を幾名か従へて。夙めて途に迎て。案内に立先へと逐ー。路次の非常に敬言べけ。
公程に近邸の荘客幾百名か公子の社参と拝見せんとて。晴る天に蓑を着るもまく

路傍に聚合たりと後に思ひ合されぬ。そを素藤の伏兵也。蓑に下る戎衣と隠さん
とその所為なりけり。既にして義通が件の社前に到りぬれば、雞栖の側に制騎牌に頼朝以
来の舊制を記し、因て人馬を駐めさせ、轎子を出ぬれば、右に小森篤宗あり、左に浦安兼勝
あり。田税逸友が先に立ち、廿屋景能が後に跟て、幼君の大刀を持る。這餘の近習童
扈従と共に十四五名、敬言固の雜兵四五十名、齊月々敷之と、石階の上下、左右に星列せ
り。威儀儼然たる光景、偖り一程に義通が找て本宮に登りぬれば、當社の神主出迎て
幣帛を奉り、武運長久の壽詞を唱へ、登時浦安兼勝、奉りて駿馬一疋、大刀一口、白
銀三十挺を獻供の目録を遞与りけり。偖而義通が内陣に拜礼すれば、その間神樂堂に
祢宜ども吹鼓折を得貌に田舍神樂を奏したり。支果て義通が宮伝の神社に詣ぬ。
作法初に異なるに、只その獻供同じかりで、大刀馬代なる白銀を、三十挺まゐらせらる。源家の
氏神なれば、當社も粋礼を尽果て、諏訪の神社へ赴きぬ。那大樟樹の頭に小森篤宗の

指揮に依て、御内の雜兵十名許、その餘も遐途に整言固あり、各棹棒を衝植て、尊非常に
備へり。既にして御曹司の詣来ぬと守えりが大家棒を傍に置て、跪坐て、遥に拜迎を
介程に里見御曹司義通君、亦復諏訪の鶏栖前に轎子を立て、老黨近習に守
護せられ、找て本社に詣ぬ。その路一町有餘、秋尾石の左右なる松柏ヨヽく並枝なる老樹
なりしとのたまふ。幾世歴に久て、苔滑に路直りぬ。その中に那大樟の一樹、觀に達り千
枝の茂葉、青葱として世に稀なれば、大家敬鳥なれども、御曹司に、共介の本性、童子に似ず
ゆく。外視も觸らず、其頭に近着ぬ程に、案内に立る本膳に、神主遲し、と呟く。本社の
かさに走る折、故意端緒を断らんと、平履一隻脱棄てぬ。樹蔭に退く程もなく
義通君、樟の頭を徐々と過りぬ。武弓も忽然として那樹の虚より、連放る鳥銃の
響と共に、幼君の左右に従ふ両個の老黨、小森篤宗、背を撃れ、又浦安兼勝、項を痛く
撃傷られ、仆れ、倶に息絶る。這大変に胸を潰せり。田税逸友、廿屋景能、その它、昵近

素藤を諏訪の神社へ
うつ
ぐんぬかん作がある処へとおるを、うつべきろれどもの別よ固しでさんもあるまじせり

義通と擒へる

扈従の毎齊一吐嗟とぞ。ひとりふ走聚ひて幼君の。眉ふ蹙て果敢なく。敵ふ向ひて。
ける。尓程ふ大樟の頭ふ敬言固の雑兵们ハ頭の上を蜚ぶ銃丸ふ備る甲斐もなく駭噪
ひて。敵多くもあり。逃るもあり。物の要ふハ連ようあらで。進退都て度を失ひさる。折を得ずと木戸
虚より。顕れ出る居ヨヲの賊兵或ハ短槍小眉尖刀を。見るを〳〵走蒐るを。御曹司の近習
们ハ。身も寄せじと。推隔〳〵〳〵投結ぶ。烈しく奏聞。敵ふ突戰ふ。勝負を分ずけふ。
又那奥利本膳。本社の敬言固と。伴て出置ふる。三千個の隊兵を。先ふ找めて。横さまふ。
嘯ひて。駈破れば。里見の士卒。ヨヲく。敵ふ。御曹司の身邊ふ。衛るものもなく。一個の
賊兵。走蒐て。捕捕んとすれば。義通。透さず。小刀を。抜て。殺拂ふ。刃尖ふ。件の賊徒。若
干。斬られて。苦と。叫び。仆れる。折ふ。近て。賊将。是。則。素藤。義通の後方より。利キを
合て。動き。持る。小刀を。打落ふ。身。放ず。と。角。見ると。當春。才ふ。十一の。小腕ふ。衛ふ。喪ひて。
勢ひ。暴ふ。強敵ふ。當ふ。べくもあらで。ばれば。竟ふ。刃と。捲合ふ。れて。吐嗟と。叫ぶ。間もなく。素藤。

義通を。操縮め。肱腋ふ。抱ひて。又那木虚へ。引かへ。走。田税。逸友。苫屋。景能。ひとく。過ふて。
又。驚。怒て。共。侶ふ。拉る。賊徒を。殺拂〳〳〳〳て。迂ふ。程ふ。檐の。内より。又。打。出る。笛。響。高ひ。鳥
銃ふ。逸友。も。景能。も。駭て。矢。場ふ。仆れ。ら。佶。り。程ふ。素藤。ハ。義通を。生。拘て。地道を
潛り。城内。る。洞口より。出て。走。ら。留守を。委ね。碗九郎。们。ハ。示。誘。り。義通。と。堅。く。一
室ふ。閉。篭。け。ら。是。より。先ふ。諏訪の。神社の。鶏栖の。頭ふ。下向。なる。里見の。伴當。ヲヲ
かり。逸ふ。なる。銃。響。と。叫ぶ。居ヨヲの。人。聲ふ。大家。駭ひ。噪立て。原来。社頭ふ。異変。ふ。ら。ん。尋
思ふ。及ず。稠人。安危を。伺ひ。ち。ず。と。。。馬。ふ。ら。銃。る。歩。並。取。次ふ。槍の。鞘。外。を。避。
と。惴。雄の。士卒。前後を。爭ふて。走。ら。入。人。と。せ。程ふ。思ひ。ら。け。ら。後の。方。より。素藤。ハ。伏兵。二
三百名。忽然。と。聚。合。ら。ら。真。先ふ。找む。賊徒の。頭。人。是。則。別。人。ら。ら。ら。時。願。八。平田
張。盆。作。左。右ふ。備。雑兵ふ。銃。十。挺の。鳥銃。と。一。度。連。發。ら。れ。ば。響。ひ。天。地を。動。く。
宛。百。千。ち。霹。靂。ふ。隊。士。鬼。れ。る。ふ。異。ふ。ば。憐。む。べ。里見の。士卒。ハ。又。茲。ふ。て。も。幾。十。人。欧。駭。る。

ゑ槌と仆れけり。登時願八盆作は賊徒を找め槍を拈て一二三十七ゐ嘯て蒐れば里見の士卒は既ゐ名ヨク躬方を敷せ。かゞも毫も撓まず踏住て這里と先途と戰ふ程ゐ裏面なる奥利本膳们の義通の老黨近習を大々ゝ子ゝで敷る果ゝる賊徒を驅て出て来る。又前後より挾ゝて息も類ぎ攻りゞ然ゝも里見の伴當は悍ゝ戍るゐあゝねども大刀折れ矢尽て躬ゝて名を惠ゝ恥を知るゆゝ敵と引組ゝ刺違ゝて屍を其首ゐ曝ゝ去ゝヨクゝたの餘名も多ゝ雑兵の命を免れゝ絶ゞ戰ゝ越ゐ果ゝけり。徒而願八盆作は素藤の逸早く義通を擒ゐゝる。ゐ古文の趣と本膳们ふゝち听て造化精妙と不勝の歎び郎便敵の馬武具を一隻も逃さゞ雑兵们ゐ奪合ゝゝつ常の路を走りて躰て凱陣を登時奥利本膳は預け〻れる隊兵を俱ゝて又那大樟の杇虚ゝる地道を潛ゝつ俱ゐ舘山へ還ゝけり。甲竟義通敵ゐ合ゝ〻れて伴當ヨク戰殺をる後の話説甚麽ゞゝ次の巻ゐ解分るを聽ゞか。

南總里見八犬傳第九輯巻之五 終